新潟県立長岡農業高等学校　創立110周年記念式典

式　　辞

本日ここに、新潟県立長岡農業高等学校創立百十周年記念式典を挙行するにあたり、新潟県教育委員会様、長岡市長 様、新潟県議会議員 様をはじめ、多数のご来賓の皆様、旧職員、同窓各位、保護者の皆様のご臨席を賜り、心から御礼申し上げます。

また、創立以来、幾多の有為の人材を世に送り出し、今日に至るまでの歴史と伝統を積み重ねることができましたのも、数多くの関係各位のご厚情の賜物と改めて感謝申し上げます。

歴史を辿ってみますと、本校が創立された明治40年代は、日本の近代化の進展とともに、勢いのある時代でした。そのような時代に、当時の上組村長堀井八郎次氏が「農村振興にはまず農業教育の普及から」の見識を持って、村を挙げて誘致運動を行い、明治41年４月20日、古志郡立上組農学校として開校しました。

その後、大正11年４月、県立に移管し、新潟県立上組農学校と改称。昭和23年４月には学制改革に伴い新潟県立上組農業高等学校と改称しました。同年６月には定時制課程の設置、また、山本分校、種苧原分校が設置されました。そして昭和29年に校名を現在の新潟県立長岡農業高等学校と改称しました。その後、学科の改編、定時制や分校の閉課程や閉校など幾度の変遷を経て、現在に至っています。

この間、本校は日本の農業分野に多くの優れた人材を送り出し、本校の一万六千名に及ぶ卒業生が、県内はもとより全国各地、幅広い分野で活躍しておられますことは、本校の誇りとするところであります。

さて、今の農業高校は、農業就業者の減少や生徒減少による学科再編、学校統合などが行われ、今後も減少傾向にある厳しい現状を抱えております。

しかし、昨今の情勢を見ますと、Society5.0の社会とも言われているような、グローバル化の進展に加え、ＡＩやＩＯＴの目覚ましい発展とともに社会の在り方が大きく変革しようとしている時代を迎えています。更に広く目を向けますと、先端技術を活用しての経済発展と環境問題等の社会的な課題解決を両立させながら、持続可能な世界や社会の実現が求められており、そうした要請に農業への期待も大きくなってきています。そのような中、これから訪れようとする新しい社会に対応できる力を確実に身に付け、基盤産業としての農業及び関連産業で活躍する人材をしっかりと育成していくことが農業高校に課せられた使命ではないかと考えています。

さて、生徒の皆さん。校長室には、牧野忠篤初代長岡市長が書した「去華就實」の扁額が掲げられております。「去華就實」とは花を捨てて実を取るという意味で、見た目よりも中身を大切にするということであります。生徒の皆さんには、本校の教育目標にある豊かな知性と健全な心身を養い、責任感と協調性を身に付け、社会に貢献できる自立した生徒へと成長できるよう、内面の充実に努めていただきたいと思います。そして、先輩方が築いてこられた伝統ある長岡農業高校を誇りにするとともに、皆さんの成長や活躍を期待し、支え、応援してくれる多くの人たちへの感謝を忘れずに、新たなる歴史を築いてくれることを期待しています。

結びになりますが、県教育委員会、長岡市や地域の皆様、同窓会、ＰＴＡの皆様からは、本校に対し、日ごろ温かいご支援と激励を賜り心から感謝申し上げます。そしてこの百十周年という節目が、これまで多くの先人が築き上げてきたよき伝統を踏まえて、これからの時代の進展に対応した長岡農業高校へと発展していくための歩みを進めていく契機となることを祈念し、式辞といたします。

平成30年11月10日

新潟県立長岡農業高等学校　校長　中村　満夫